



上) 5:50 NHK の第一報画面には「東海地方」の文字
中) 6:30 神戸震度 6 を伝えた NHK の震度分布
下) 地震直後の NHK 神戸放送局の様子

時間の情報を分析すると、五時五十分四十秒に「東海地方で強い揺れ」と表示し、引き続き「近畿地方に強い揺れ」と緊急震度で伝えられた。そして六時〇分になつて最初の神戸震度6をアナウンサーの声で伝え、六時三分に「震源地が淡路島 M7・2、津波なし」を伝えた。しかし、この神戸震度6の情報は六時十分に一旦取り消され、六時十六分に再度神戸震度6が確認されて画面にも表示された。六時四分に初めて神戸から電話リポートが入り、「揺れは大きかつたが火災なし」と伝えている。この段階では、釧路や八戸の地震の震度6の灾害イメージを多くの人が持つたであろう。

そして、神戸がただ事ではないとのイメージが持てた最初の情報は、地震発生から約一時間後の六時四十五分に神戸放送局から電話リポートで「七箇所から火災発生」が伝えられた時であった。筆者はこの時点で、「神戸がやられた!」との灾害イメージを確信し、現地へ向かうために羽田へ直行した。七時のNHKニュースで神戸放

送局内の映像が初めてオンエアされ、神戸からの被害映像も届き、火災情報や各地で生き埋めが発生等甚大な被害情報を伝えはじめた。地震発生後一時間は、NHKの情報で見る限り、こんな大災害になるとイメージがつかめない灾害情報であったと言えよう。

今回の災害では、初動の対応が様々な機関で問われたが、実は報道機関においても情報が収集できなかつたことから、地震発生から一時間以上、この災害のイメージを捉えきれなかつたこと、さらに伝えきれなかつたことを認識する必要がある。

3. 慣れっこになつて いた震度6

今回災害のイメージがつかめなかつたもう一つの原因として、「震度6の灾害イメージ」を指摘する必要がある。昨年十月四日の北海道東方沖地震と、同じく十二月二十七日の三陸はるか沖地震も震度6であった。この時の釧路市や八戸市における震度6の灾害のイメージが先にあり、今回の災害を捉える認識として、このイメージに引きずられたことは、誰もが否定できないことであろう。あらためて、初動に判断する灾害のイメージの要因として震度階に引きずられる危険性を認識する必要がある。

もし、直後の情報として震度7が出されれば、少なくとも初めてみる震度7によつて、今回の災害事象の現実に近づくことができた

一月十七日午前五時四十分、兵庫県南部を震源とするM7・5の都市直下型地震が発生した。死者五千四百余名、重傷者二万六千名、三十万人以上の避難者を出し、戦後最悪の震災となつた。甚大な被害内容を受けて、この阪神大震災における災害報道に、テレビ・ラジオ・新聞等すべてのマスメディアが戦後最大の規模で取り組んでいる。

地震発生から四十日余りが経過し、この段階でこれまで送り続けた災害報道について、「誰のための災害報道なのか」という視点で中間的に検証してみたい。

1. 「まさかの大地震」が発生

「大阪でこんな大きな揺れだつたのだから、さぞや東京は壊滅的だろう」

地震発生後、大阪で地震を体験した人から聞いた第一声である。

この言葉は、関西では地震がないという関西人の災害観を象徴的に

表している。今回、災害報道を送り続けた阪神地区のほとんどの報道マンの中にも、同様な潜在的意識があり、また、放送局としてもマニュアル等災害報道への備えもほとんどなかつたなかで、「まさかの大地震」が発生し、突然戦後最大規模の「まさかの災害報道」を送り出さなければならない状況に追い込まれてしまつた。

2. 初動期見誤った「災害のイメージ」

今回ほど、地震発生直後の情報から災害のイメージを把握することが難しかつた災害はなかつたといえよう。NHKの地震発生後一

渡辺 実
まちづくり計画研究所
所長・技術士



「災害報道」は被災地を救つたか

阪神大震災と放送メディア

かも知れない。直後はこれまでの震度6のイメージに引きずられ、報道機関も政府防災関係機関と同様、初動の判断ミスを犯したこと、肝に銘する必要がある。

4・フレームに收まりきれない大震災

今回の灾害は、どんなに引いてもカメラのフレームでは捉えきれない規模で発生した。

前述したように、地震発生直後、これまでの震度6の灾害イメージで送り出した災害報道は、昨年の北海道東方沖や三陸はるか沖の時と同じ災害報道のスタイルで動き始めてしまった。時間とともに入ってくる被災地からの驚くべき映像や記者からの大都市災害型のオペレーションに切り替える間に、やみくもに被災地へカメラクルーや記者を動員し、手当たり次第に被災地状況を伝え続けざるを得なかつた。道マンは少なくなかつたろう。

しかし、このギャップを確実なものにし、災害報道のオペレーションを大都市災害型のオペレーションに切り替える間に、やみくもに被災地へカメラクルーや記者を動員し、手当たり次第に被災地状況を伝え続けざるを得なかつた。

例えば、報道局に入ってきた情報を現地からのリポートだけで終わらせるのではなく、〇〇時現在の被害地図情報として整理し、全体情報を時系列をおつて提供することも必要であろう。ヘリコプターカラの映像リポートの中でも、今送り出している場所や地名がわからぬ報道があった。こうした情報の出し方では、せっかく全体状況をつかめる映像を送り出したにもかかわらず、役に立たない情報となってしまう。報道用のヘリコプターには飛行位置が地図で把握できるナビゲーションシステムを搭載すべきである。

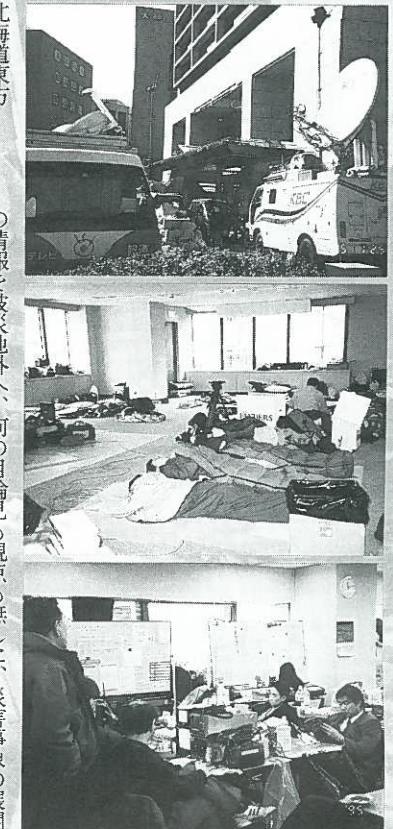
6・放送局被災型の災害報道

神戸を中心として震度7の揺れがあつたことから甚大な被害が集中し、神戸にある支局や神戸のローカル局も被災した。放送を送りださなければならない放送局自身が被災するという非常に厳しい条件の中で災害報道が送り続けられた。

昨年の同じ日に発生したノースリッジ地震の時に、筆者は放送局が被災するイメージを持つ必要があることを提言したが、それが現実になつてしまつた。

幸いにも、大阪の準キー局が無事だったことから、対応が可能となつたが、全国の放送局は、自らが被災することを前提とした災害報道のシミュレーションと対策を早急に検討する必要がある。特に首都圏直下型地震が懸念される東京キー局は、局舎の耐震診断と補強、放送機能のバックアップシステムの導入等具体的な対策の実施が急務である。

上) 車載局が次々と現地入り
中) 支局の隣に設けられたMBSスタッフ宿泊所
下) 神戸市役所プレスセンターのABC基地局



5・「全編ピックリ報道」で終始

地震発生から一週間程度は、各局とも被災地から二十四時間大量

の情報を被災地外へ、何の目論見も視点も無しに、災害事象の展開に振り回されながら垂れ流し続けた。

つまり、報道が次に起る災害像を予測できずに、時間の経過とともに目まぐるしく展開する災害事象の後ろをついていくのが精一杯という報道内容であった。

十七日の午後以降に動員された応援スタッフが、報道の視点を持たないまま次々と被災現場へ送り込まれた結果、直後に行われたビックリ報道の後に、新しいスタッフが再び同じビックリ報道を続けるという、まさに「全編ピックリ報道」となつた。

阪神大震災はその被災量のあまりにも大きい規模に、今づくら

ている災害報道のシステムではとても捉えきれないという客観的状況があつたことは、事実である。しかし、被害の全体状況を把握するために、災害報道として冷静にその時の情報を伝える視点が必要となる。

7・被害映像が犯した罪

今回は、各局とも放送時間を競うように地震特番を流し続けた。

地震発生から一週間は、概ね一時間おきに地震特番が二十四時間流し続けられ、阪神大震災関連一色になり、大量の情報が送り出された。それら地震特番の冒頭は、必ずといってよい程「地震発生から今日までの出来事を振り返ります」との振りで、多くの犠牲者を出した火災現場や建物崩壊現場、高速道路の崩壊現場等ショッキングな映像ばかりを繰り返し流した。

被災者は、地震発生直後はこの地震で神戸の町はどうなつたのか、西宮の状況は、芦屋の様子は等被害の全体像をつかむために被災情報を必要とする。そして、三日程経過すると、被災者は概ね被害の全体を把握することができ、その被害が甚大であればある程、また身内に不幸な出来事があった場合はなおさら、今度は出来るだけ忘れようとする心理状態になる。こうした被災者の心理状態をまったく無視して、放送の送り手の勝手な思い込みや都合によつて、せつかく忘れようとしている映像がこれでもか、これでもかと被災者を襲つてくる。

被災した老人が避難した老人ホームの保母さんは、初めは多くの情報を得る必要があると判断し、老人たちがテレビを見る時間を制限しなかつたが、そのうち無口になつたり食欲がなくなる症状が見えはじめたことから、テレビの時間を制限したという話を聞いた。災害報道を送り出す側にも、こうした被災者の心理状態に配慮する、



(神戸市庁舎) 放送局も被災する (行政機関も)

放各局ネット毎にその置かれている状況が異なることから、それぞれに解決すべき課題であろう。

以前から指摘しているように、地震発生直後は災害報道の主役は被災地の局であるべきであり、被災者に必要な「安心情報」を如何に的確・迅速に提供できるかが災害報道の使命であることは、絶対的な価値観として再確認しなければならない。

ところが、被災地局側から「起きている出来事をただドキュメントタッチで伝え続けるのが被災者側に立った災害報道である。これが今必要な情報であって、災害の検証はまだ早い」といった議論が聞こえてきている。誤解してはいけない。災害報道も、当然ジャーナリズムでなければならぬ。なぜなら、この震災から何を問うのか、何が問われるのか、そしてその課題を解決する方策メニュー等をメディア側、被災

面の情報伝えるため、全体情報を伝えるため、報道ヘリコプターからの映像情報は、その機能を有効に果たすことになる。今回も、多数の報道ヘリコプターが被災地上空を飛びかった。地震直後、筆者が確認したヘリコプターの数は、最大で十七機が同時に被災地上空を巡回していた。もちろん、報道関係だけではないが、これらヘリコプターの騒音は、瓦礫の中の生存者救出活動に大きな影響を与え、被災者のストレスの要因となり、また、振動や風圧により壊れかかった建物の危険度を増幅した。

避難所の朝は、NHKの『おはよう日本』の中継ヘリの爆音によって目覚める」と聞いた。

災害現場の報道ヘリコプターの問題は、今始まつたことではない。しかし、今回の出来事は、救出活動に影響があった。被災者の心の病の一因になった、というまさに暴力行為としての重要な問題提起がなされている。難しいことはわかつていいが、真剣に検討する必要がある。今回ヘリコプター映像の功と罪が同時に問われた。

阪神大震災は、五千四百人以上の死者を出した、未曾有の激甚災害になつた。この死者の数を、警察の方発表される数値情報として各局とも、時間をおつてボードに表示しながら伝えた。死者の数が百人のオーダーから、千人、二千人、そして五千人と膨らむうち、まるで選挙速報で得票数を数えるように無気質な伝え方にだんだんとなつていつた。「今、伝えているのは死者の数であり、得票数ではないぞ」とブラウン管にどなりつけたい気持ちになつた時もあった。

ある民放局では、死者の数を伝えている最中に新しい情報が入り、「只今、新たに一人の死者が増えました。これで三千二百五十六人になりました」と伝えてCMへ移ってしまった。この情報を、親や子供が行方不明の状態にある被災者が見ているのだ。「あ、この一人とはお父さんではないか?」と思って、居ても立てもいられない状況になるであろう。数が増えたことを伝えるのではなく、せめてそこの遺体の性別、年齢、発見場所、もちろんお名前がわかつていれば、当然その氏名等の情報をきちんと伝える努力をすべきであろう。

あまりの死者の数の多さに感覚がマヒし、死者一人一人の尊厳を無視した、たゞ数の推移を伝えるだけの異常な災害報道の姿がそこにはあった。五千人の死者というのは、ジャンボジェット機が十機同時に墜落して生存者なし、という地獄のような出来事であり、それをあなたたちは伝えているのだということを忘れないでほしい。

10. 東京キー局と被災地ローカル局との温度差

地局側からも提示していく姿勢が必要となる。特に、一ヶ月目等の節目の災害報道では、その時点での問題点を明快に指摘するジャーナリズムとしての視点を持つた番組づくりが求められるだろう。

東京キー局と被災地局との役割分担や、日線の差異化、全国ネットとローカルとの時間配分も検討しなければならない。そして、災害発生から三日間は視聴率調査を停止して、視聴率を意識しない、そして問わない、災害報道に係わる全員が被災者のための災害報道に専念できる環境をつくり出す必要があるのでないだろうか。

もうじき、地震発生から二ヶ月が経過する。これまでの国内災害のイメージを一変した厳しい状況が被災地に継続している。

この災害から、様々な現行の防災対策の弱点が指摘されて来ている。その最も重要なポイントは、「被災者支援のシステムとオペレーションのあり方」が問われたことである。この課題は、災害報道にもいえることであり、災害報道は被災者支援を行う重要な役割を持つことを再確認し、災害後に生き残れるための情報を出し続けなければならない重要な使命を持っていることを忘れてはならない。

その被災者支援の使命を果たすため、ハード、ソフト両面の対策を真剣に講じなければならない。筆者は今回の災害で、今のシステムによる災害報道の限界を感じており、まだまだ多くの課題を指摘しなければならないが、枚数の都合で別の機会にしたいと思つ。災害報道の原点は、「災害で不幸にも不条理な死を遂げた五千四百人の死者の一人一人の顔が見える災害報道のあり方」を追求することにあるのではないだろうか……。

やさしさが要求されるのではないだろうか。

8. 死者の尊厳を守る伝え方

9. 報道ヘリコプターの暴力

地震科学的常識が欠如していた― “予想外”といふ人災

阪
神
大
震
災
と
放
送
メ
ディ
ア

一・望まれる門外漢の勇気

阪神・淡路大震災は、日本ならず世界での災害史に残る事件となつた。事件と敢えて呼ぶには理由がある。兵庫県南部地震としてそれを地球科学の觀点から解析する必要があるだけではなく、発展著しかつた近代大都市が崩壊するという、ヒトの生命とその社会への計り知れない衝撃を与える災害となつたからである。

数多の情報がとび交い、多様な論評・見解が渦を巻く中で、この地震と災害との認識における分解能の悪さがさらには人々を混乱に陥れているのは残念である。両者を律義に区別して論じなければならぬ、と言っているわけではない。原因と結果という不離の関係にあり、一体として、あるいは総合的に扱われねばならないことは当然である。しかしながら、報道にも意見にも共通して認められる大きな困難があることに注目したいのである。それは、事件全体としての複雑

性の問題といえる。個別をいかに詳しく取材し、解説しても、複雑性を克服することはできない。

事件発生からすでに四十日余、未だにその全容は見透しにくい。正しい自然科学の視座とバランスのとれた、明析な社会科学的な切り込みとがますます要求されるところである。この種の広域科学には、今のところ日本では残念ながら先例もなく、体系もない。旧来の“専門”という枠組みを超えたり、はずしたりすることに大きな障壁が存在するからであろう。すなわち、今、この時点でのこの事件の専門家はいらず、それ故にむしろ門外からの勇氣ある解析の地平が拓かねばならない。

濱田隆士
放送大学教授



二・或る門外漢の立場

一九八一年、東京大学教養学部に、基礎科学科第一（システム基礎科学）と称する、マクロシステムをターゲットにした新学科が設置され、その上に立つ大学院は、総合文化研究科として自然系と人文・社会系にまたがる新しい組織となつた。自然部分は広域科学と呼ばれ、その中で筆者は「地球系計画学」なる講座担当となつた。ここでいう計画とは、人為の計画以外に、地球の歴史がデザインして成り立つもの、というニュアンスを含んでいた。いわば、地球科学を軸とし、人文・社会の広がりにも及ぶマクロシステムの切り口を標榜する学際的（トランスディシプリンアリ）な研究分野といえる。

一九八六年に著した『地球科学への招待』（東京大学出版会）において筆者は、広義の地球環境問題、生命にかかわる問題と共に災害を含めた安全性の論理と倫理について論じた。地球科学と社会生活との接点といふ捉え方である。東京大学退官後、放送大学における放送科目制作にあたつてもその主旨を貫き、生涯学習における自然観・社会観の在り方にも言及している。

一九九四年十一月には非常勤講師をつとめる早稲田大学教育学部における「地球環境科学」の講義でもこれをとりあげ、北海道南西沖地震（奥尻島津波震災）や雲仙普賢岳の火碎流災害等をきつかけに記した雑誌『アエラ』（1993年8月17日）への投稿記事「防災に防災大学―災害にも新体制必要」と題する小文をリファレンスに記した雑誌『アエラ』（1993年8月17日）への投稿記事「防災に防災大学―災害にも新体制必要」と題する小文をリファレンスに記した雑誌『アエラ』（1993年8月17日）への投稿記事「防

スとして安全性の認識の意義を論じ、活断層にもふれた。

また、一九九五年一月十日の上智大学における「地球と生物」の講義では、同様主旨を、頻発する大規模地震を主題として、関西地区の内陸直下型地震とその災害について解説し、不斷の注意が肝要であり、国家レベルでのシステムとしての防災政策の不可欠を説いたばかりであった。一月十七日当日朝の授業では、ポケットラジオをマイクで流しながら、情報が不足し混乱している時点で、かなり突つ込んだ解析を行い、前週の授業の補足としていたきさつがある。

本編は、こうした背景を持つ筆者が、あくまで非専門家として、しかしながらできうる限り広域的・総合的な視点をふまえながら、兵庫県南部地震とそれによる阪神・淡路大震災について考えるところを、とり急ぎ羅列したものである。

三・Factsとその捉え方

筆者が得た第一報は、NHK総合の当日朝六時のニュースであり、ラジオ（TVとの同時放送）によるものであつた。

一九九五年一月十七日、午前五時四十六分。淡路島、神戸で震度6。広く中国・近畿で震度4を記録。震源地は淡路島北部、深さ二十km、M7.2と報じられ、気象庁はこの時点では津波の心配はないと発表。後日、データの整理が進むと共に震度7の地域があつたと追加・訂正。また紀州白浜で津波が観測されたことも発表した。

一方、より密な観測点を持つ京都大学防災研究所は、淡路島から海域にかかる深さ十五kmから、神戸付近での深さ六kmにかけての約

二十kmにわたる一帯が破壊したものであるとして、点による震源特定ではなく、震源域的なニュアンスの発表を行い、浅発直下型地震の特性をよく捉えた見解を示した。しかし、その後、気象庁や国土庁の発表では震源地の位置は変わらず、地震名を一九九五年兵庫県南部地震 災害を阪神大震災から阪神・淡路大震災とした。当初から活断層の動きが考えられたが、神戸地区では人工的な被覆物による不明瞭性があり、淡路島北部の北淡町域で地表顕型が認められ、また海峡底にも異常地形が発見された旨のマスコミによる報道がある。しかし、正確な変移量や地下の断層の位置については、右ずれであることを除いて正式にはまだ発表されていない（二月末現在）。衛星を使った測地や地下探査結果を総合した詳しい記録ができるだけ速やかに公表されるべきである。

阪神・淡路大震災の大きな特徴としては、「地震がない場所」といふ、地球科学を学ぶ者にとって、それこそ信じ難い安全神話の近代大都市での浅発直下型であつたことが第一に挙げられる。第二には、関東大震災とはまた違った性格の多発火災による多大の犠牲。第三には世界に誇っていた筈の高速道路や新幹線架橋等の壊滅的破損、であつたとしてよい。いずれもが、「予想外の『あるいは』、『予想を上まわる』被害であり、その原因は、関係者の説明では、『予想されなかつた』規模の震動であつた」のであり、これを「『予想外』災害事件」として解析する必要がある。

残念な事態としか言いようがないが、その結果、災害対策のあらゆるレベル・部局での中枢が機能せず、初期対応に大きな狂いが生まれ、災害を増幅してしまつたという、防災システムや防災意識の

不十分性が露呈した。「不可抗力の事態であつた」という表現は、被災当事者には当てはまるが、国家をはじめとする地域や人命の安全を政策として遵守すべき責任を負う立場からは、軽々に発せられるべきことではあるまい。

甚大な被害が発生した今回の地震にも、せめてもの僥幸がいくらかあつたことは、特筆に値しよう。それは、発生時間が新幹線始発直前であつたことを筆頭に、交通混雑時ではない早朝であつた点、多発火災であつたにもかかわらず、いわゆる竜巻風あるいはおり風といった強風がほとんど発生しなかつたこと、そしてそれと関連してガソリンスタンドの誘発がなかつた点、さらに、被災直後、まだ組織立つた救援活動が行われない時期に厳しい寒さや降水等の悪天候が訪れなかつた点等が挙げられよう。

四・上智大講義時点での問題点

地震発生前における一般的な解説と、具体的に震災進行中の解説とを、いくつかの違った観点から列挙し、若干の説明を加える。

- (A) 日本国列島のテクトニクス・バランス
 1. ここ二年くらいの日本列島周辺での大地震の発生率急上昇。

NHK解説委員の表現を借りれば、「地学的平和の時期は終わった」となる。地質時代に生じた巨大地震はもつと活発であつた可能性が大きいので、激動期とは言い難いとしても、地殻変動の活潑化あるいは活性化とは言えよう。】

2. フラジャイルな日本列島のテクトニクス的構造。

【列島は年平均2cm東へ、太平洋底は8cm西へ、結果として相対的に10cm程度東へ動いているが、最近のように多発しあはじめるところに再びその周辺にバランスをとるための動きが必要になり、大・小の地震を誘発する。】
3. 地殻の耐ストレス力の限界と破壊のトリガー。

【地殻は地球潮汐によつて二十cm程度は周期的に上下しているし、平均して水平成分一kmにつき一～五mくらいまでは変形に耐えられる。しかし、日本周辺で幾つものプレートがそれぞれ異なる成分の動きを続けていたため、列島全体はガラスの城のようにもろく、ぎりぎりのいわば臨界状態を保つていて、例えば、海流の流路変更（水塊の移動）によつてさえも文えがこわれ、地震を発生させるということがわかつてきている。ストレスは太平洋プレートの沈み込み面に添う西方へ傾斜した面添いと、より内陸寄りの浅い（十～二十km程度）部分の一帯に集中していることが、震源分布により経験的に知られている。前者が海溝型地震、後者が内陸直下型地震を発生させているのである。】

④ 関西での地震活動の特徴

1. 京都・鳥取・丹後・福井等々、大地震の例は少なくなく、内陸直下型であるため、エネルギー規模（マグニチュード）で示される数値に比してより大きな灾害となる。
- 【神戸については一九一六年にM6.1の記録があるが、活断層として六甲衝上断層、野島断層等々、地学的には活断層集中域

2. 空白域と安全地域について。

【東海大地震は、このよつたな空白域を想定した、予知必要性の一つの基本条件をみたすものとされ、密な観測網と綿密な防災政策がとられている。一方、しばらく地震がないから安全地帯といつて、神戸一帯の神話は、活断層分布について知らなかつたとしても、日本列島のフラジャイルなテクトニクス構造からすれば、空白域と同等の評価が与えられるべき位置を占めている。】

⑤ 今回の震災について

1. 初期情報が極めて断片的である。災害の最大の原因となることが常識となつてゐる情報の欠落が明瞭である。

【交通網寸断は消火活動や救急活動を大きく阻げてゐるであろう。机上の防災マニュアルが見直されることになろう。】
2. 「関西は安全」の風評の社会的背景。

特定の学説はない。古くから危険が指摘されていたことを考へると、神戸港一帯のウォーター・フロント計画に当たつて、開発にとつてマイナス要因となる危機感は嫌われ、何となく、また誰も言ふとなく、「安全であつてほしい」から「安全じやないだ

2. 防災には、一分でも早い情報伝達と、少しでも早い判断にもとが大切であり、専門家の間だけに情報が保存されるのではなく、新聞等でも天気図と類似の扱いを受けて然るべきものである。また、地震名や地震の震源地の呼び方が曖昧であることは、防災上マイナスとなる。例えば、日本海中部地震といった類の命名は、地理的にも矛盾を持ち、世界の斯界から笑いものにされても仕方あるまい。災害名と地震名との明確な使い分けが必要であろう。】

⑤ 防災をめぐつて

自然災害には個性があり、一般論では掌握できないことが多い。【台風でも地震でも火山でも、場所・時間・エネルギー規模等いずれも固有性が高く、防災にはその点を十二分に勘案した施策が不可欠である。最近、さまざまな企業体や官公庁で人事の交流が著く、それなりの効果もあるとされる。しかし、こと防災に関する限り、一旦事が起これば、その事件の種類に関する専門家の重要性のみにとどまらず、そのポイントについての地域精通者（ローカル・スペシャリストあるいはリジョナル・エキスパート）の存在がキーとなる。今回の震災は近代都市で起こっただけに、その様相がひときわ強く、行政・マスコミ等での対処のおくれのかなりの部分を占めているといつてよい。俗っぽく表現するなら、かつてのよう、その地域社会のことなら何でも知っているお巡りさん、といった存在が、近代都市構造の中で大きく減退してしまっているのである。】

五、マスコミの動きについて

災害時に果たすマスコミの役割は、表現しきれぬほどに大きく、多くの秀れた貢献がなされている。手足をもたぬ災害の主務官庁では全く手の出ない現場についての初期情報の発信と熱心な事件のフォローイング、進歩した技術による大量の映像情報の迅速な取得力などである。それだけに、マスコミへの期待はますます大きくなり、ついにはその判断力や表現力に大きな責任を伴うことになつたともいえる。情報化社会におけるそつしたマスコミの災害時の役割と対応について、今回の例をとりあげ若干の私見を記しておきたい。

「うか」を経て、信憑性のない安全性の社会的論理が形成されてしまつた、とみるべきである。



「古いから倒れた」で了解され、手抜き工事への社会的批判が弱められている

予知よりも防災や危機管理に重点を移すべき、という意見は地震予知連絡会周辺でもすでに出されていた、と報道されているものの、具体的な施策は見られない。】

2. 地震は複雑な構造をもつ地殻内部で発生する自然現象であり、単純システムである物質科学的なモデル解析に主眼を置いた予知の発想では対処しきれない。

【人為システムでは、それがいかに先端的研究であっても、自然界の複雑システムを解析できる実力はまだない。計算に必要なパラメーターの数も精度も全く不十分である。したがつて、予告科学の一層の充実が必要であることに間違いはないが、それに偏して、他の手法や視点を軽視すべきではない。】

3. 前兆現象のアイロニ

【前兆は現象としてキャッチされるものであるが故に、事件が生起して初めてその関連が認められ、それであると認定されるものである。経験科学しか頼れない現在、精度や理論はどうかく、事実関係の把握に努力し、将来の解析に備えなければならない。】

4. 公正な情報の重要性

地震に関する情報は、たとえ被害がないものでも、できるだけ社会一般に広く伝えられるべきであり、まして、正確性を欠くようであつてはならない。

【安全性の論理からすると、日本がいかにフラジャイルなテクトニクス・シチュエーションにあるかを日頃から認識しておくの

づく指揮系統の確保が基本となつてゐることは言うまでもない。がしかし、災害とは、えてしてそのシステム 자체の寸断・破綻から傷が大きくなるものである。

【情報収集システムは、明らかに末端から中央への流れであり、指揮システムはその逆である。よく言われる災害に備えての分散化についてはきわめて曖昧な発想が多く、かえつて混乱を招くおそれもある。要は分断したときの、臨機のクラスター・システムがどのように機能するかに配慮した事前の状況設定と、さらに上位への集約システム、あるいは臨時の権限委譲システムのバランスよい施策が必須なのである。アメリカのFEMAが全て良いわけではないが、イタリアやイスランドのような災害多発国での先例を大切にし、そこから多くを学びとるべきであろう。】

民市ヨコハマ

特集 相次ぐ廃刊、問われる雑誌ジャーナリズム
『マルコポーロ』、強気路線に落とし穴
『エルメディオ』、茶坊主どもが夢のあと
『話の特集』、時代に勝てず無念の廃刊
「万引き」容疑で76日間も拘禁

長沼節夫
山口俊明

マスコミ市民

〒150 東京都渋谷区神山町2-10 神山町Yビル
Tel 03-3481-0577 振替・00150-3-88463
年間購読料 6300円 送料込
(本店は直接お申込み下さい。)

六 危惧される「予想外」効果

活断層が横切っている新幹線トンネルで何が起こっているのか、国民的注目の点もある。

という重大な觀点は、ほぼ完全に無視されている。研究・教育機関への打撃については、受験生のみのとり上げ方では何も見透せない。等々である。

旧い構造の建物や、建築基準の違う時期の建造物で被害に差が出た、という捉え方は、調査が進んでいない段階で、かなりの誤解を生ぜしめることになった。いわば手抜き工事がかなり大きな原因でもあることに対する社会的批判はもっと厳しくてよい。オンライン復旧時の、通告不十分なまでの処置で第三次災害が起こつたことを軽視できない。指揮系統を失った時の末端のビュ

特集 相次ぐ廃刊、問われる雑誌ジャーナリズム

『マルコ・ポーロ』、強気路線に落とし穴

『話の特集』、時代に勝てず無念の廃刊

「万引き」容疑で76日間も拘禁

95年 No.317 定価500円(税76円)

1 初動態勢に關連して

わが国には火山や地震に対する組織立った監視組織はなく、事件が発生しても実地に出動するマンパワーもない。したがつて、学術的にも防災上のでも、しっかりとした映像による事実把握は、マスコミ各社の資料に頼る以外ないという、寂しい実情にあるのである。

今回の阪神・淡路大震災に当たつても事情は全く同じであり、結果として國の中核機関の出おくれと判断ミスが問わされることになつた現行の慣習や制度で、それぞれのマスコミから一致して事に当たる運用は無理であり、國が責任をもつてデータ取得、あるいは利用ができる手法を開発しなければなるまい。筆者のいう防災庁の提案はこの点をも含んでいる。

ところで、今回の大震災に絞つて考察すると、マスコミの情報取り得や発表方法に、いくつかの問題点も見出される。今後のためを思ひ多少辛口の論評と評されることを覚悟で、要点を指摘しておきた

初期から情報の流れが寸断されたため、偏った取材に止まらず
るを尋ねたところ、ラジオは見習情報として一番つか

るを得なかつた事情があるが、ライブな視覚情報として一番わか

マスコミ報道一般に共通して目立つのは、地球科学的常識の弱さである。いかに専門的なことであっても、しつかり咀嚼くしやくしておかなければ、メディアの役目を果たしたことにならない。例えば今回多用されている活断層、海溝型地震、内陸型地震、(都市)直下型地震、空白域と『安全神話』域、等についての内容理解に甘さが目立つ。マグニチュードと震度との違いは出せるのに、エネルギー規模での大地震と、人口稠密故に生じる大震災との分解能が極めて悪い。固い基盤の意味も、使われる局面によっては安全性の向きが逆になることも理解されていない。再来周期の実態についても吟味不足で、かえって不安材料になる。

3. ビジュアル情報への偏り

一口クラシードもまた災害を広げる要素となつたことへの反省、批判はもつと強くてもよい。逆に、現場での迅速な心急処置に粉骨碎身した方々の努力はより高く報じられてよい。

あらゆる被災の原因に「予想外だった」「予想を超えていた」という修飾語がついて語られた災害であるが、この「予想外」という捉え方には、過去の处置の確実な裏付けがない限り、実態を反映しない言いわけになつて、今後の対策に禍根を残すことになる。技術的な問題にしき、社会心理的な問題にしき、今回の災害で最も大きな教訓は、いかに高度な科学技術文明においても、自然のエネルギーは余りにも大きく、複雑な自然システムに対してもいかに無理解な段階にあるかを深く再認識し、大きな反省のうえに制度や生活面での復興を考えねばならない、という点につきよう。それ故に、「予想外」という言葉に鋭いメスを入れ、責任逃れの好材料にされないよう努力する、国の責務があり、一般社会人の監視の義務もある。ベースとなる地球科学的常識の滲透が望まれることは言うまでもない。

専門用語の理解について

マスコミ報道一般に共通して目立つのは、地球科学的常識の弱さである。いかに専門的なことであっても、しつかり咀嚼(ちくしゃく)しておかなければ、メディアの役目を果たしたことにならない。例えば今回多用されている活断層、海溝型地震、内陸型地震（都市）直下型地震、空白域と「安全神話」域、等についての内容理解に甘さが目立つ。マグニチュードと震度との違いは出せるのに、工学ルギー規模での大地震と、人口稠密故に生じる大震災との分解能が極めて悪い。固い基盤の意味も、使われる局面によつては安全性の向きが逆になることも理解されていない。再来周期の実態についても吟味不足で、かえつて不安材料になる。

3. ビジュアル情報への偏り

確かに大きな衝撃や感動を与えるのは、良い絵情報である。その間に、しかしながら、質的な重要なポイントが後退してしまつている点がいくつかある。例えば、日本中の地下街・地下鉄保有都市が第一に注目したトンネル内・地道・地下室被災についての情報がごく僅かしかない。完全に安全であつたという取材もない。

2 専門用語の理解について

り易く、それだけに呴嗟の判断への素材提供という重責を負うことになる宿命を考えると、残念ながら、地域事情にうといＴＶのカメラアイが目立つ結果となつた。加えて、一般的にいつて動画のフレームワークには、ターゲットをしぼったスチルのファインダー操作との大きな落差がみられた。広域で、切れ目のない情報提供と多くのネガから選べるスチル世界との本質的な差ではあるうが、課題を残すことになつた。

ラジオは災害時の命綱 被害報道より安心報道

中村信郎

ニッポン放送編成部特別職

阪 神 大 震 災 と 故 送 メ テ ィ ア

——ニッポン放送が地震災害報道マニュアルを策定された経緯と現在の規定内容は。

中村 十五年ほど前までは、災害だけでなくクーデターみたいなナンセンスなものまでを含めた非常時対策規定を持つていたが、より現実的な規定にしようとということで、大地震への対応に的を絞ったマニュアルに切り替えた。地震を対象にしたのは、地震は突発的な広域災害だから、これにしっかり対応できる体制があれば、どんな災害にも対応できるとの考え方からだ。

マニュアルの内容は、国内外で大きな地震があるたびに更新している。現在のマニュアルの中身は、地震発生後の放送対応が中心だが、昨年から警戒宣言が出た時を想定した対

を持つようにしたい。

——エリア内の全ラジオ・ネットワークといふ考えはあるのか。

中村 以前からそろじた共同体制の必要は指摘されてきたが、日常の競合関係もあって先のばしにきれてきたのが実情だが、今度の阪神大震災を契機によつやく真剣に共同・分業体制の可能性を検討する空運が出てきた。震災では伝えるべき情報はきわめて大量であり幅も広い。とても一局ではカバーしきれない。A局は安否情報、B局は生活上の注意事項情報、C局は交通情報を中心に担当し、必要な情報を隨時交換するといった協力体制が必要になつてくるだろう。

——ライフルインと言われる電気、ガス、水



一階部分が消えた北上ホテル

道の関係機関とのネットワークはどうか。

中村 ニッポン放送では、地震パーソナリティや地震レポーターを任命して、日頃から電気、ガス、水道、電話などの防災関係者とつながりを持つようにしてもらっている。こうした日常的な人間関係が、いざという時に大切ではないかと思っている。

ただ、これまで局側の取材に対し、防災関係者が応えるという関係だが、これからは、地震発生時には防災関係者の方で主体的に情報収集・整理し、その伝達のためにラジオを積極的に活用してもらう形態も考えられる。ラジオ局も防災機関の一つであり、他の防災機関と密接なネットワークを組んでいくことが、安心報道を充実させるためにも是非必要と思う。

——阪神大震災の被害状況、あるいはその報道から、中村さんが改めて「課題」として受けとめられたことは。

中村 とくに強調したことは三つある。一つは、「防災一口メモ」

——マニュアルの基本理念は、応規定を別途検討・作成中だ。

——マニュアルの基本理念は、

中村 ひとことで言えば、被害報道よりも安心報道を、ということ。今度の阪神大震災の報道もさうだが、マスコミの報道はどうしても被害報道に陥りがちで、それが結果的に過剰報道の弊害を引き起こしている。ラジオの災害報道の基本は、地元住民に安心を与える情報の伝達にあるのではないか。安全を守るためにの注意事項の放送、安否情報、交通情報、ガスや電気、水道などライフラインに関する情報などだ。安心報道に徹することが大切であり、その情報は地元以外の人にも十分に関心をもつて聴いてもらえるはず。

もう一つ、この安心報道の延長線上の考え方

方として、被災地を「面」で捉えることを基本にしている。六年前にサンフランシスコで発生したロマプリータ地震の際、マリーナ地区の火災がテレビ報道されたが、その映像だとまるでサンフランシスコ全体が炎に包まれているように見え、先述の過剰報道批判が起きた。こうした報道に陥らないためにも、地震災害報道は被災のない地区も報道する「面」の報道が絶対に必要だと思う。

——東京で大地震が発生した場合のニッポン放送の初動体制は。

中村 ニッポン放送では、社内の地震計が震度5以上を記録したら直ちに災害特別報道の体制に切り替えることになっている。夜間の場合は、特別職、報道デスクを含む社員が最低八人は宿直待機しており、直ちに緊急体制に入る。社員との連絡は、エリア内に設けてある十九のブロックごとのキーマンを中心取り合う。ブロック内の全社員からの情報も、そのキーマンに集中する体制を敷いている。キーマンには近々携帯電話を持たせる。キーマンはレポーター役もつとめ、また、他の社員やその家族から集めた情報を局に伝え、放送に生かす。将来的には、全社員が携帯電話

を日頃から地道に放送していくこと。地震が起きてからの報道も無論重要だが、起きてからでは虚しい。起きる前に、地元住民の防災意識を高めることが、ます大切だ。たとえば全民放が一日一本「防災一口メモ」を放送するようにしたら、効果は大きい。これは、国民の電波をあずかる放送局の義務と言つてもよいのではないか。

二つ目は、「ポケット、ハンドバッグにラジオを」ということを、もっと強く訴えることだ。今回の震災で何人の人がラジオを持って逃げてくれたか。被災地のラジオ局は一生懸命放送したが、どれだけ被災者に届いていたか。ラジオが手元になければ結果は役に立たなかつたのと同じこと。これは、ラジオ局の怠慢ではなかろうか。

最後に強調したいのは、「災害に強いまちづくり」の必要性だ。まちづくりの主役は地域住民、ラジオ局はそのお手伝いをする。五千四百余人の貴い生命は、災害に無防備なまちづくりの犠牲。ラジオ局は地域住民と一緒に、この「防災に強いまちづくり」に、今から取り組んでいく必要がある。



東海地震対策の前線から

非常時情報のパイプ網が必要

川端信正

静岡放送報道制作局局付部長

阪 神 大 震 災 ハ フ 放 送 メ テ ィ ア

「近い将来、大地震が起きたかもしれないとの不安を抱える人が、東京で五四%、静岡六〇・三%、大阪四三・七%」

阪神大震災が起きた後、民間の調査機関サーベイリサーチセンター（本社・東京）が行った住民意識調査の結果である。地震が起きた前に感じていた同様の不安は、東京一四・七%、静岡一〇・七%、大阪一〇%であつたといふ。今回の震災が社会に与えたショックがいかに大きかつたか、この数字は物語つてゐる。

日本列島の過去百年余りを振り返ると、死者が百人を越える地震は、一八九一年の濃尾地震（死者七千人余）以来十六回発生した。しかし濃尾地震から福井地震（一九四八年）

までの六十年間には十四回あるのに対しても、それ以降の四十年間は二回しか起きていない。

兵庫県南部地震が起きたのは午前五時四十分であった。放送各社は地震速報を出した。NHKの例をみよう。

「駿河湾を震源にマグニチュード8クラスの大震災発生の恐れ」との東海地震説が公表されたのは、一九七六年のこと。東海地震説は、まもなく大規模地震対策特別措置法という法律の制定を経て「学説から地震を予知し迎え撃つ国家事業」まで発展した。

地震説以来、震源域になる静岡県ではさまざまな地震対策が取られ、静岡放送も東海地震対策に取り組んで来た。放送諸設備の耐震化や被災した場合のバックアップ体制などハード面、予知情報から地震発生に至る地震

情報をいかに正しく混乱なく伝えるか、地震発生後の被災者生活情報など対策は多岐にわたっている。東海地震説から十九年、幸い東海地震はまだ発生していない。しかし今回の阪神大震災は、東海地震に取り組む私たちにとっては大きなショックであった。

阪神大震災を検証し、災害報道が今後どうあるべきか考えてみたい。

遅れた被災地の情報

兵庫県南部地震が起きたのは午前五時四十分であった。放送各社は地震速報を出した。

まず各地の震度が報じられる。「京都震度5、大阪、奈良、和歌山、姫路震度4など」の表示である。しかし画面には神戸、洲本のは、まもなく大規模地震対策特別措置法といふのだから当然の選択である。京都からは震度が抜けている。やがて京都からのレポート。入電している各地の震度の中で一番大きいのだから自然の選択である。京都からは被災報告はない。地震速報は続く。しかし神戸、淡路島が大変な事態になつていることが報じられるまでにはかなりの時間がかかった。

この神戸、洲本の震度が欠落している速報画面を見て、気象庁関係者の中には、「もしや

するか」ということである。

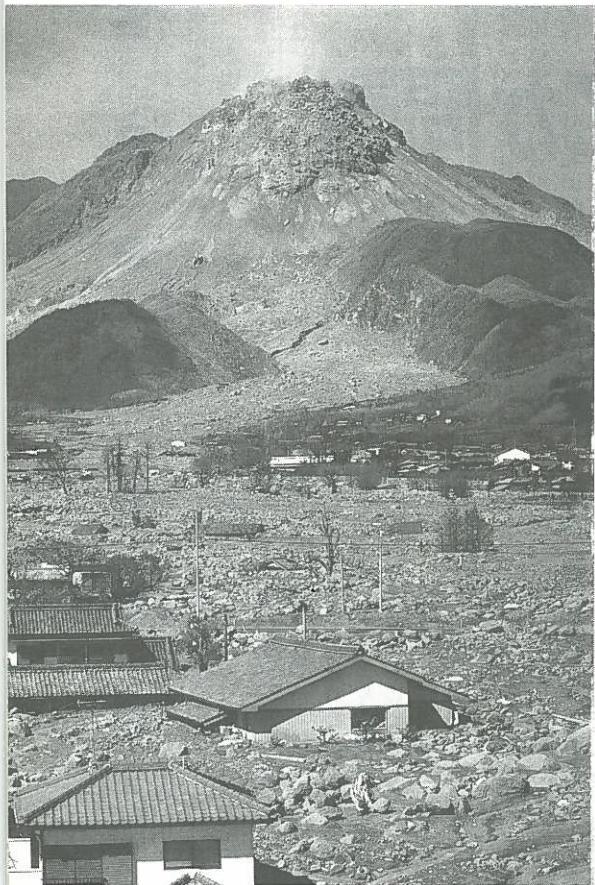
放送各社がそれぞれ単独で情報の入手活動を行なうだけでは、被災者の満足する情報が量的にも質的にも至らないであろう。災害時は平常時と異なつて情報ルートが大きく制約を受ける。細いパイプで情報入手を懸命に行つても限界がある。

そこで行政ルートとメデイアルートの情報を合体させることが必要であろう。またメディア間ではそれそれが得た情報を共有することも必要だろう。

行政と放送、そして新聞も含めた三者が情報を共有する。三本の矢が重なることで太い情報が確保出来るという期待がある。

そのためには非常時の回線として、行政とメディアの間に、災害時にも通信が途絶しない、しかも太いパイプの敷設が必要である。静岡県では東海地震対策として静岡県庁と放送各社とが防災無線網で結ばれている。一般電話回線の途絶もしくは輻輳時にも、これを利用して音声とファクスによる双方向の通信が可能となっている。

こうした非常時の情報のパイプ網を日本列島に張り巡らせるなどを提案したい。



普賢岳の麓では未だ鬱いが続く(西川清人氏撮影)

情に訴えるための必要悪と言えるかも知れない。それだけに取材する側の配慮が欲しい。被災者や遺族に対する取材もやむを得ない部分もあると思う。しかしそこには一定のモラルが必要だ。取材でありそれが仕事だととしても、一人の人間として心からのお見舞いの気持ちを表した上で、興味本位ではなく何を伝えるべきなのかを自問しながら、取材対象の理解を得るべきだと思ふ。

被災者、遺族という取材対象であると同時

災害を取材する側のモラル

栗原 賢二の地元局から

柾田柾子

テレビ長崎報道部ディレクター

ノタード

カル放送に身を置き、雲仙・普賢岳の噴火災害取材に当初から携わってきた立場から今回
の阪神大震災のテレビ報道を考えてみたい。
普賢岳の麓では今も人々が火山と向き合つて生きているが、KTN（テレビ長崎）では
火碎流犠牲者を出した九一年六月三日の一年
後に自らの報道を検証する番組を制作した。

「苦言は別にして、情報伝達という面ではどうだ
だったかと、敢えて尋ねた住民の一人からけ
「もうテレビばかり見てました。市から何か
言つてくるよりテレビの方が早かつたですも
ね。それだけにもつと火碎流の怖さを声を
大にして教えてほしかった」という声が返つ
てきた。

「島原の住民には直接迷惑でしたけど、全国の皆さんには情報を伝えていただいた。その結果としてこれだけの義援金が集まった。住民にはいろいろありましたけどね。マスクミニ公害、一時そういう感情を持っていたことは事実ですね」(島原市助役)

「もうテレビばかり見てました。市から何か言つてくるよりテレビの方が早かつたですもんね。それだけにもつと火碎流の怖さを声を大にして教えてほしかった」という声が返ってきた。

に災害情報・生活情報を最も必要とする人々に、十分な情報は的確に伝わったのかどうかこの点については遠く九州において関西のローカル放送を見ていない私には論じられない。今後復興に向けてテレビは何を伝えるべきか、ともすればマスコミは熱しやすく冷めや暮らす人々がいる。ローカル放送を別にすればそのことはもうほとんど伝えられておらず島原は忘れ去られたに等しい。

「島原にこだわるぞ、避難している人々にこだわるぞ。国なんかが格好いいこと言つても絶対言い放し、言い逃げはさせないぞ。」かつてそういう決意を語つたある新聞社のデスクの言葉を思い出す。

るべき報道と、実際に行われた報道について是非立ち止まって考えて欲しい。当該住民に対する報道の在り方、取材のモラル、報道陣の危険の認識と防災体制（今にも崩れ落ちそうなビルの前でも、ほとんどヘルメット姿を目にしなかった）についてそれぞれの系列で検証し反省すべき点は反省してほしい。忘れ去られようとしている島原を全国に伝えきれない、法律の壁を突き崩せなかつた無念さを抱えながらテレビに働く者の一人として強くそう思う。

ら説明を求められていらだつてはいいだろうか。「プライバシーの無い体育馆での避難生活ももう××日目です」。そう伝えるリポーター自身が、夜の避難所に身を置いて住民のプライバシーを侵害している。心身ともに疲れ果て、眠りたい人もいるだろうに無神経にライトをあてる局もある。

放送批評懇談会会員に聞く 震災報道ここが問題



品田雄吉（映画評論家）

マスコミは政府の初動の遅れを責めています。その通りだと思いますが、放送だつて立ち上がりは決して早くなかつたと思います。

ぼくは午前六時半ごろNHKのテレビを見て震災を知りましたが、その時点での放送はまだ事態の重大さを把握していました。迅速な対応、予期せぬ事故が起きたときのバクアップ体制の確立。放送もこの二つをし

つかりやらなければならぬでしょう。政府

同様、私たちも対応が遅かつたのです。

尾中洋一（株式会社J.O.B光筒會代表、シナリオライター、ディレクター）

一九六一年、父を大炭礦災害で失つたが、その際の報道が表層的で、会社、官僚機構発表ニュースに頼りすぎた偏向報道であったことをへの反発。批判が今日の制作者としての自身の原点となつていています。（掲載は到着順）

今次震災報道にも同じような欠陥が随所にみられ、日本ジャーナリズムの貧困を痛感することに、事件報道と責任追及はバラレルに展開されるべきものなのに、中途半端に終わるのは、戦争責任追及の甘さと同質で疑問。

落合孝幸（著述業、日本仏学史学会名誉会員）

阪神大震災の惨害について、テレビ・ラジオは、現地の映像や被災者の音声などによって印刷媒体以上の迫力ある機能を存分に發揮してみせた。今から振りかえると反省すべき点もあるが、取り敢えずは関係者の日夜の努力にまず感謝すべきであろう。その中でもN

H K夜の手話ニュースは、五分あるいは十分という限られた時間にも拘らず毎日の動きの最重要点を的確簡明に伝達していた。番組担当者のニュース・センスを高く評価したい。

遊佐雄彦

発生から三日間、関西テレビを中心とした

フジ系列を見た。NHKが一番、食い足らなかつた。各局並びになつてからは繰り返しが多く、早々にマンネリ化した。この点でもNHKがひどい。

「復旧」では困るはず、むしろ「新神戸」を作るくらいの青写真の呈示が必要。それに反すれば「復旧ストップ」も大事。大局を見ない復旧報道はノーテンキと思う。

青柳森（エッセイスト）

映像は瞬時に世界に飛び日本の震災を速報した。同じとき混乱の被災地では人々が身辺の情報不足に苦しんでいた。電波が最優先すべきは、まず被災した人々への情報供与ではなかつたか。必要な地域サバイバル情報を可能な限り集め、知らせる。その努力は十分だつたか。おどろおどろした映像よりキメ細かい局地情報は、一般視聴者にもボランティアにも、いま必要なことを伝えただう。焼跡にビラを貼っていた被災者が痛ましい。

麻生千晶（作家）

取材地点が片寄つていた。私の知人で神戸以外の被災者が全く取材に来ないと怒つていた。便利な避難所や絵になる潰滅地点ばかりを映像が追いかけた。その反面、生の人間はお涙頂戴視点に傾き、ワイドショー的悪弊が拡大された。初期の頃にゾロゾロと湧いて出た地震学者たちの学者バカぶりは噴飯なもの。まだ生き埋め状態で水もない時点で、活断層の解説を長々と喋らせる無神経ぶりは、局側に大いに責任があった。猛省すべきである。

篠崎敏男（テレビプロデューサー）

慎重より敏速と果斷を重んじる放送は「阪神大震災」を持てる力を投入して報道したが、行政対応の決定的な立ち遅れの現場にカメラが居続けなかつた。人々は夜間のヘリコプタ

ー騒音と学者たちのしたり顔の災害分析に怒りを持つた。放送各局は切実緊急の課題として「災害報道」のあり方の見直しに着手している。ワイドショードが痛みの共感を目指して被災者の声とボランティア活動にこだわり、虫の目で伝え続けている事は評価していい。

志賀信夫（放送評論家）

阪神大震災が発生したころの報道に限つていうならば、発生直後は自治体などの連絡機能がマヒしてしまって、それが多かつたので、災害報道も重要であることはいうまでもないが、被災者に対する配慮が人命尊重という立場からも極めて大切であり、リスナーの声をもつと積極的に取りあげていくべきだろ。一般に「知らせる報道」だけでなく、被災者の「知られる権利」（アクセス権）をより一層重視すべきではないかと思う。

今村庸一（放送作家）

衝撃映像が先行しがちなテレビでは、どうしても被災の大きいところが強調される。倒れた高速道路やビルなどの映像ばかりではなく、倒れなかつたものや、その両者の比率などを客観的に示す努力がもう少しほしかつた。八九年のサンフランシスコ地震のとき、崩落したベイ・ブリッジの映像だけが誇張されたが、今回も、第一報の映像が部分的なものが全体的なものか、報道する側のバランス感覚が問

茂木幹弘（コミュニケーション文化研究所代表
表、日本大講師）

わかれことになつた。

インタビュー取材と現場レポートのしゃべりのますさと非常識な態度に強く反省を促したい。悲惨な状況が見える現場から何を伝えたいのか、被災者がマス・メディアに何を訴えたいのかなどをまつたく考えていないような表現が随所に聞かれた。とくに、女性レポーターの無神経な装いと表現には、「それでも放送人か」と叱声を浴びせたいほどひどかつた。ことを磨き、ハートフルなレポートができるよう第一歩から勉強してほしい。

大藏雄之助（東洋大学教授）

- 1、中継すればいいというものではない。
- 2、ヘリの騒音は生存者救出の邪魔になる。
- 3、インターネットで馬鹿な質問はするな。
- 4、全国ネットとローカル放送を区別せよ。
- 5、放送局は手助けをして協力態勢をとれ。
- 6、地震の原因の分析より誘導が優先する。
- 7、地震学者の話を聞くのに遠慮をするな。
- 8、スポット報告の時に、どこにいるのかがわかるよう地図をスーパーせよ。
- 9、記者は日頃から日本語を勉強しておけ。

竹山昭子（昭和女子大学教授）

民放の報道に問題点が多かった。どのようないい情報が必要なのかの認識不足。「ものすごい

ていく努力が特に民放の場合欠けていたと思います。（③）テレビ報道側に過去の地震から得た教訓の蓄積（ラジオの情報収集力が優れてること、水・食料・トイレ対策）が驚くほどなかつたのは全く意外・心外でした。

亀井淳（日本ジャーナリスト専門学校講師）

震災発生最初期の数日間は、「なにが起つたのか」と「どうすればよいのか」の情報が忙しく交差する緊急報道の連続だったと思う。前者は被災地でない地域向けで、行政当局に事実を知らせ、ボランティアなどを立ち上げらせる効果があつたが、被災地住民に適切な指示を与える精神的な支援を示す放送は多くなかつた。結果、第一線報道者たちの努力にも拘わらず、湾岸戦争を遠くから見たときのような「災害ショー」の印象が拭えなかつた。

金澤寛太郎（広島市立大学教授）

テレビ側の自己批判の中に「大局報道」の限界を歎く声（筑紫哲也）があつたが、大局報道が限界をきめたとは思えない。むしろ被災者に本当に必要な大局が的確に伝えられないことに問題があつたというべきだろう。テレビは情報の総合力を生かして、全体状況を正確に伝えることにもっと努力してほしい。実況アナウンス、インタビュー、地図、現場見取図、問題点整理のフリップ等、テレビの基本的伝達力の退化は極まれりだ。



NHKが設置した街頭テレビ

支援物資のラジオ

ボランティアグループの「避難所通信」

した、と戦前派は思った。

伊藤雅浩（TBS視聴者サービス部）

水害時のローカル放送の経験から安否情報の放送はマニュアル化されていましたが、今回全国規模の安否の問い合わせに放送は対応できないことがはつきりました。NHK教育テレビは死者名簿の全国放送を続けましたが、あれは安否の問い合わせに答えるものではありません。できないことはできないと放送は言うべきです。放送局別に役割の分担をあらかじめ決めて電波の有効利用を図れと意見に対してもできないと否定すべきです。

小山雄二（TBS総務局）

①ENG取材のテープに日付日時が記録される装置の必要を今回ほど感じたことはありません。②初期報道は結果的に被災地以外の視聴者を対象とする態にならざるを得ませんでしたが、被災者向けの報道に早く切り換えた

にしてはなるまい。ただ、一過性的な駭なセンセーショナリズムや横並び競争意識は克服した上で、各局新しい視点と方法論を身に付けてないと、戦後文明の総点検にもなるこれらの長丁場を持続することは困難だろう。

田中惣一（国際コミュニケーション・デザインコンサルタント、NYフェスティバル協議会審査理事）

日々「改善への姿勢」を感じたのはNHKラジオだ。当初の注意の呼びかけから「風呂は、入れ歯はどこ」という生活情報、逆に各避難所からも「食品は足りた」「食品が不足」ときめ細かく流していた（でも中央には伝わっていたのか）。聴き手も一体となり、ホームステイの受け入れに驚く数で応じていた。切実な情報だけに英語以外の外国语、聾啞者への配慮が課題と思ふ。

藤田真文（常磐大学専任講師）

一月十七日、あの日の被災地にとつて、放送メディアの有用性とは何だったか、自省しなければならないと思う。今被災地で求められているものを丹念に取材し、外部への働きかけを行つことは可能だろう。また、政府の初動が遅れているのなら、それをリアルタイムで監視・批判し、一刻も早い危機管理体制の組織化を促す世論を喚起することもできるだろう。非災地のための「のぞき窓」になつ

煙が立ち上っています。また火の手があがりました」のようないい画を見ればわかることをセンセーショナルに実況。土地勘のある記者がどの地区、どのビル、どの道路と、情報を冷静に伝え、災害対策に役立てるべきだつた。今回はNHKが健闘した。特に地震発生とともに自動的にビデオが作動し十秒前からの映像を記録する装置を開発していた。お見事。

土肥茂樹（共同通信テレビ部記者）

テレビ各社の一連の報道は、一口にいつて『壮大な無駄』。戦後未賀有の大事件についてNHKを除き、民放各社は系列を越えた取材態勢が組めなかつたのか。芸能リポーター以外の上質の記者、上質の取材、一定の視点を持つた連続特集などの企画ができなかつたのか。ほとんど変わらぬ同じ視点・画面・取材・質問、同じく乱れた日本語。この報道を見て半世紀の安寧が、この国を明らかに三流国に

月刊新聞研究

4月号 4月1日発売予定
定価820円

地域紛争を報じる

国際報道の現状と課題
地域紛争を報じる
冷戦後の世界と民族問題
多様な文化の「違い」のなかで
〈取材の一線から〉
IPPI年次報告・前文より
争地域で取材して
ボランティア・ヘルプ・ゴビナの現場から
ロシア情勢を追って
地域紛争と国連の動き
ゴマPJK取材の教訓
IPPI年次報告・前文より
阪神大震災と報道

毎日放送、松下電器の協力による避難所三
十カ所の文字受信機設置と、救援物資などの
七番組の緊急放送。テレモ日本とNHKによ

①停電の災害地でテレビは速報の特性を果たせなかつた。放送局も要員も被災する問題をふくめ対応の困難さを改めて痛感。

②空からの過当なレポート競争。ヘリコプターの音は助けを求める人々の声を、かき消していたのではなかつたか。

③一刻を争つて取材に行つたにしても、レポーターの中には無思慮過ぎる服装の人がいて、二次災害も考へハラハラ。かといて首の作業着姿にも抵抗を感じました。

田原茂行（メディア評論家）

今回、ビルなどを除くすべてのメディアの中で、被災者に対し、最も詳細かつ大量の情報をお送りしたのは文字放送であつたと思われる。

毎日放送、松下電器の協力による避難所三十カ所の文字受信機設置と、救援物資などの七番組の緊急放送。テレモ日本とNHKによ

菊地恭子（フリーライター）

①停電の災害地でテレビは速報の特性を果たせなかつた。放送局も要員も被災する問題をふくめ対応の困難さを改めて痛感。

②空からの過当なレポート競争。ヘリコプターの音は助けを求める人々の声を、かき消していたのではなかつたか。

③一刻を争つて取材に行つたにしても、レポーターの中には無思慮過ぎる服装の人がいて、二次災害も考へハラハラ。かといて首の作業着姿にも抵抗を感じました。

鈴木嘉一（読売新聞記者）

今回、多くの報道陣が殺到したのは神戸市だつた。最大の被害を受けた都市だから、当然と言えば当然だ。淡路島も震源ということで、現地からのリポートをしばしば目にした。しかし、西宮や芦屋、宝塚などの各市もかなりの被害を受けたのに、神戸や淡路島の陰に隠れてしまつた印象がなくもない。「テレビに映つた避難所に救援物資が集まる」という話が本当だとすれば、取り上げる地域にもバランス感覚が必要なのではないか。

平松齊（情報通信ジャーナリズム研究会代表）

被災情報についての評価が高かつたとすれば、それは行政の情報システムが余りにも無力だつたことによる。安否情報や生活情報に

地に殺到して回線がパンクした。電話は使えず、道路は渋滞した。結果として、消防活動、救援活動に大きな支障をきたした。テレビの災害報道については熟考すべきである。

鈴木嘉一（読売新聞記者）

今回、多くの報道陣が殺到したのは神戸市だつた。最大の被害を受けた都市だから、当然と言えば当然だ。淡路島も震源ということで、現地からのリポートをしばしば目にした。しかし、西宮や芦屋、宝塚などの各市もかなりの被害を受けたのに、神戸や淡路島の陰に隠れてしまつた印象がなくもない。「テレビに映つた避難所に救援物資が集まる」という話が本当だとすれば、取り上げる地域にもバランス感覚が必要なのではないか。

平松齊（情報通信ジャーナリズム研究会代表）

被災情報についての評価が高かつたとすれば、それは行政の情報システムが余りにも無力だつたことによる。安否情報や生活情報に

ているだけではあまりにも情けない。

香取淳子（山形県立米沢女子短大助教授）

被災者への目に余る取材は減つたと思う。

だが、テレビは依然として固定的な構図でしか震災をとらえていなかつた。被害の甚大さ、悲しみにうちひしがれた被災地の人々。その視点からの報道ばかりがまき散らされたら、どうなるか。案の定、各地からの電話が被災

地に殺到して回線がパンクした。電話は使えず、道路は渋滞した。結果として、消防活動、救援活動に大きな支障をきたした。テレビの災害報道については熟考すべきである。

鈴木嘉一（読売新聞記者）

今回、多くの報道陣が殺到したのは神戸市だつた。最大の被害を受けた都市だから、当然と言えば当然だ。淡路島も震源ということで、現地からのリポートをしばしば目にした。しかし、西宮や芦屋、宝塚などの各市もかなりの被害を受けたのに、神戸や淡路島の陰に隠れてしまつた印象がなくもない。「テレビに

ついてもラジオなどが電話など通信メディアの補充機能を再発見した半面、具体的ニーズに応えるにはやはり放送には限界があつた。

小地域ごとの簡易な情報システムとの「緊急ネットワーク」によってマスとパーソナルをつなぐ新しい機能をもてるのではないか。一方的、画一的な被災像だけに終わらずに。

真々田栄一（脚本・演出家）

その時バリ島を旅行中だった私は、ジャカルタTVで大震災の発生を知つた。帰國後目にしたものは、各局こそつて凄惨を極めた現場の状況報道だった。それはそれで報道の第一弾として当然のことであり、いたしかたないとして、問題は今後の報道のあり方である。

落ち着きをとり戻した現在、被災直後の横一主張をもつた報道番組の展開を望んでいる。

石井源康（TVガイド編集部）

正確なレポートをしようとしたながら、思わずせんだアガがいた。災害現場の声高な女性キヤスターのマニキュアが、おできのかさぶたのようみえた。レポーターの見たまま聞いたままにプラスされるのは、ものの見方考え方、人となりである。この種の放送、CM入りの民放にはなじまない。災害と選挙は、われわれが視聴料で支えるNHKに任せたら

どうか。ただ情に訴えるだけの、感情過多な番組はごめんこうむりたい。

石井清司（作家）

今回はテレビ取材・報道側の抑制のきいた姿勢が好印象（論外のクルーはあつたが、これは毎度のこと）。むしろ震災報道の「充実」は、被災された方々の理性的言動と人間性によって助けられ支えられたの觀。いかに「じたり顔」でない分析、論評に仕上げられるか、キヤスターとスタッフの力量が問われた。日常編成を切りきれなかつた局はみじめ。（一週間後からのふくらませ（ヒューマンドキュメント）に出色は少なかつた。



17日、現地入りした小澤潔国土庁長官。すぐに担当をはづされた

新聞経営130号

3月下旬発売予定 1230円（送料・別）

マルチメディアの現状
（座談会）米国の現状を視察して
見市元朝日／馬渕勝之（日経）
／大林圭一（東京／富永守義（北海道）
／河村至誠（熊本日日）／山田恭司（中日）
新聞の公共性と再版
新聞再版はなぜ必要か
渡邊恒雄（読売）
新聞をとりまく法律問題と新聞の公共性
海外に見る新聞の流通制度と再版
新聞協会「欧米再版事情調査団」報告

日本新聞協会
千葉区
内線
田代
電話
郵便
便番
1階
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
7010
7011
7012
7013
7014
7015
7016
7017
7018
7019
7020
7021
7022
7023
7024
7025
7026
7027
7028
7029
7030
7031
7032
7033
7034
7035
7036
7037
7038
7039
7040
7041
7042
7043
7044
7045
7046
7047
7048
7049
7050
7051
7052
7053
7054
7055
7056
7057
7058
7059
7060
7061
7062
7063
7064
7065
7066
7067
7068
7069
7070
7071
7072
7073
7074
7075
7076
7077
7078
7079
7080
7081
7082
7083
7084
7085
7086
7087
7088
7089
7090
7091
7092
7093
7094
7095
7096
7097
7098
7099
70100
70101
70102
70103
70104
70105
70106
70107
70108
70109
70110
70111
70112
70113
70114
70115
70116
70117
70118
70119
70120
70121
70122
70123
70124
70125
70126
70127
70128
70129
70130
70131
70132
70133
70134
70135
70136
70137
70138
70139
70140
70141
70142
70143
70144
70145
70146
70147
70148
70149
70150
70151
70152
70153
70154
70155
70156
70157
70158
70159
70160
70161
70162
70163
70164
70165
70166
70167
70168
70169
70170
70171
70172
70173
70174
70175
70176
70177
70178
70179
70180
70181
70182
70183
70184
70185
70186
70187
70188
70189
70190
70191
70192
70193
70194
70195
70196
70197
70198
70199
70200
70201
70202
70203
70204
70205
70206
70207
70208
70209
70210
70211
70212
70213
70214
70215
70216
70217
70218
70219
70220
70221
70222
70223
70224
70225
70226
70227
70228
70229
70230
70231
70232
70233
70234
70235
70236
70237
70238
70239
70240
70241
70242
70243
70244
70245
70246
70247
70248
70249
70250
70251
70252
70253
70254
70255
70256
70257
70258
70259
70260
70261
70262
70263
70264
70265
70266
70267
70268
70269
70270
70271
70272
70273
70274
70275
70276
70277
70278
70279
70280
70281
70282
70283
70284
70285
70286
70287
70288
70289
70290
70291
70292
70293
70294
70295
70296
70297
70298
70299
70300
70301
70302
70303
70304
70305
70306
70307
70308
70309
70310
70311
70312
70313
70314
70315
70316
70317
70318
70319
70320
70321
70322
70323
70324
70325
70326
70327
70328
70329
70330
70331
70332
70333
70334
70335
70336
70337
70338
70339
70340
70341
70342
70343
70344
70345
70346
70347
70348
70349
70350
70351
70352
70353
70354
70355
70356
70357
70358
70359
70360
70361
70362
70363
70364
70365
70366
70367
70368
70369
70370
70371
70372
70373
70374
70375
70376
70377
70378
70379
70380
70381
70382
70383
70384
70385
70386
70387
70388
70389
70390
70391
70392
70393
70394
70395
70396
70397
70398
70399
70400
70401
70402
70403
70404
70405
70406
70407
70408
70409
70410
70411
70412
70413
70414
70415
70416
70417
70418
70419
70420
70421
70422
70423
70424
70425
70426
70427
70428
70429
70430
70431
70432
70433
70434
70435
70436
70437
70438
70439
70440
70441
70442
70443
70444
70445
70446
70447
70448
70449
70450
70451
70452
70453
70454
70455
70456
70457
70458
70459
70460
70461
70462
70463
70464
70465
70466
70467
70468
70469
70470
70471
70472
70473
70474
70475
70476
70477
70478
70479
70480
70481
70482
70483
70484
70485
70486
70487
70488
70489
70490
70491
70492
70493
70494
70495
70496
70497
70498
70499
70500
70501
70502
70503
70504
70505
70506
70507
70508
70509
70510
70511
70512
70513
70514
70515
70516
70517
70518
70519
70520
70521
70522
70523
70524
70525
70526
70527
70528
70529
70530
70531
70532
70533
70534
70535
70536
70537
70538
70539
70540
70541
70542
70543
70544
70545
70546
70547
70548
70549
70550
70551
70552
70553
70554
70555
70556
70557
70558
70559
70560
70561
70562
70563
70564
70565
70566
70567
70568
70569
70570
70571
70572
70573
70574
70575
70576
70577
70578
70579
70580
70581
70582
70583
70584
70585
70586
70587
70588
70589
70590
70591
70592
70593
70594
70595
70596
70597
70598
70599
70600
70601
70602
70603
70604
70605
70606
70607
70608
70609
70610
70611
70612
70613
70614
70615
70616
70617
70618
70619
70620
70621
70622
70623
70624
70625
70626
70627
706

批評広告

4月号 550円

特集

女の言葉



小川 洋子
笙野 賴子
松浦 理英子
松村 栄子

高城流
マルチメディア入門
高城剛

マドラー出版
〒107 港区南青山5-15-14
電話3406-1445



立派なビルももろかった（三宮）

組織がいかに効率的に構成・維持されたか(3)総ての決断と選択が、いかに「クリエイティブ」であったか、で評価するしかない。

岡村黎明（立命館大学教授）

第一報は海外でCNN、BBCなどを通じて知った。震災の全体像が意外に良くわかつた。数日後に帰国して日本のテレビを見たが、ヒューマン・インタレスト・ストーリーライティングが目立ち、大災害を伝える報道機関としてはまことに不十分であると感じた。現地に入つてみると、ますますテレビとの距離を実感した。そこで提案。生カメラ（天カズ）、ヘリの生中映像をもつと活用せよ。在阪局が各社分担して、震災情報、生活情報を放送せよ。

音好宏（上智大学講師）

今回の報道では、在京キー局と他局との圧倒的な取材力の差を見せつけられた。その際たるものが、完全に東京主導で進められたSNG中継であろう。テレビというメディアは、時としてデフォルメされたイメージを作るが、東京から駆けつけたりボーターたちが伝えた被災者像は、悲しみのなかに併むパターン化された関西人ばかりではなかったか。地元局のリポーターが、被災地域に住む人々の目の高さで「災害」を伝えたのが救いであった。

えば、そのことを改めて認識する貴重な機会だつたといつがいえる。

各局の個々の対応についてはコメントは差し控える。一般論としては(一)現場優先・主導の体制をいかに早く、効果的につくれたか

(二)その体制を全社員に支援・サポートする組

など役割分担するのも一案ではないか。

大前正臣

一月十七日以来、山のような震災情報のインプットを受けているわけだが、目をつむると、横倒しなった高速道路、腹が空いたとかケラしか浮かんでこない。神戸がどれだけやられ、どれだけ助かったかの全体像は結ばれないのである。これはテレビには知覚はあつても、基本的に時間と空間の統覚が欠けているせいではないか。とすると断片的映像を土台として再建論議を急がすのは危険だ。

立花一洋（放送研究者）

非居住者だが、関心事を若干挙げる。(1)放送網の機能が概ね維持できた中で、指定公共機関・地方公共機関（震災対策基本法）としての、現地放送局の具体的役割。(2)一月十五日開局の「フエニックス」の機能と各局の使命との関係。(3)NHK大阪局の安否情報（教育テレビ）の位置づけ。(4)非常時での民放非系列局から広域への情報伝送の意義。二月十七日にサンテレビジョン局から、テレビ朝日系のニュースステーションが放送されたが……。

ばばこういち（放送ジャーナリスト）

今回のマスコミの問題点の一つは、初期の段階で被災者救済のための具体的な提言を国に強力に要請しなかったこと。例えば関西地

区のメーカーや流通業に期間を区切って貯蔵物資無料放出の損金処理を国に認めさせてい

れば被災者はあれほど当初食事や衣類に困らなかつた筈だ。状況を伝える以外に国を動かすことのできる力はマスメディアはあるわ

けで、その意味で今回はマスコミのもう一つの責任に関して対応は著しく遅れたと思う。

石城太造（広告ジャーナリスト）

初動時、震災評論などは不要。東京キー局の報道番組おきまりの配役パターンは、このなか、新聞のデジタルな記事面編集システムを、東京キー局と地方局のアナログな報道

体制に活かしたい。

荻作子（放送評論家）

テレビ局へ——有名キャスターを震災地に送り込み、被害見物をさせてはいけない。TBS「ニュース23」筑紫哲也の現場リポートに呆れた。非常の場にスターはいらない。百萬言を費やしても語りつくせない惨状を、カメラは映し出しているのだから。報道者は報道することに心を奪われ、自分も一人の人間であることを忘れる。思い上がりを戒めて欲しい。ラジオ局へ——日頃から携帯ラジオをワイドショー含めて厳しい総括を望む。

柳澤健（ラジオ・アソシエイツ代表）

日本は「情報スラム」である。制度的にい

敬意を表したい。落ち着かれたらこの経験を是非とも全国の、いや全世界のラジオ局に細

大もらさず伝えていただきたい。

視聴者センターに集まつた“声”

伊藤雅浩

TBS視聴者サービス部

阪 神 大 震 災 と 放 送 メ テ ィ ア



初日は火災への怒りで溢れた

地震発生の翌日、一月十八日、TBSへの視聴者からの電話は六百八十通。通常の日の二倍以上で、それまでの一日の応答数の記録を大幅に更新した。NHKへの電話は全国集計で地震発生から十日間で十二万通。これも大幅な記録更新である。

一日目の電話がピークになるのは安否の問い合わせのためで、一日目は燃えつづける火災になすすべのないことへの苛立ちと怒りが放送局へ向けられた。

二日目の電話がピークになるのは安否の問い合わせのためで、一日目は燃えつづける火災になすすべのことへの苛立ちと怒りが放送局へ向けられた。

火を消せ。焼死ぬ人間がいるのに何やつてんだ。

▼自衛隊はどうしたんだ。税金の無駄使いばかりしやがって、肝腎な時には何もできんのか。防衛庁の電話を教える。オレが防衛庁

とに抗議するこんな電話もある。

▼この震災はね亀井静香なんて悪人をテレビに出すから起きたのよ。わたしは北海道の学会員だけど、亀井運輸大臣を許さないわよ。亀井が学会の悪口を言うから仏さまのバチがあたつて交通網がズタズタになったんじゃない。運輸大臣としての責任をとらせなさい。

——一日目は事態の深刻さが十分に伝わっていなかつたようで、のんびりした電話もある。

▼まだ地震の特別番組続ければんの？ もういいんじゃない？ レギュラー番組楽しみに待つてる。だからさあ、テレビ局は馴染みの客を大事にした方がいいんじゃないの？ 地震のニュースは画面スーパーでやれるじやん。

▼私の靈感では淡路島の北の震源地には海底三千メートルのところに人骨があります。他の靈能者にも確かめてみなさい。これが今回の大震災の原因です。水中カメラで調べるとわかります。

——調べません。

▼まもなく関東でも大地震が起きると放送したそうですが、何時に起きるんですか？ 超能力者が予言したとか聞いたんですけど。

——そんな放送はしません。

▼耳の不自由な人間のためにもつと文字を出して下さい。特に場所がわかるようになります。

被災者の安否を気遣う声

——一日日の午後から二日目にかけては、安否の問い合わせが殺到

長官にかけあつて出動させてやる。

▼村山さんはどうしたんですか。あんただちにテレビ局の人は総理大臣がどこに居るか知らないはずはないわね。すぐ記者会見をやらせなさい。ぐずぐずしているひまはないのよ。

▼山火事の時使う消防剤があるやんか。あれなんで使わんの？

▼延焼止めるためならビルの一つや二つ壊したれ。自衛隊に小型爆弾落としてもうたらどうや。

▼ホースをつないで、川から水を汲みあげたらどうですか？

——誤解・思い込みによる電話もある。

▼ヘリコプターのプロペラの風で火の勢いが強くなるじゃないか。

▼大声出して人命救助やつとんのにヘリの音がうるそいつて聞こえへんやないか。

——火にも地上にもヘリはそんなに近づけはしない。

震災の前日、ニュース番組で亀井運輸大臣が公明党を批判したこと

する。

▼朝から何べんかけてもあかんのどす。電話通じしまへん。どこぞで聞いたらわかるところおまへんやろか。教えておくれやす。

▼NHKかて民放かてみんな同じやないか。手分けして、こつちやのテレビ局は中央区、こつちやのテレビ局は灘区とか、映すとこ分けたらどないですか。どのテレビ見たら身内が探せるかわからへんやないですか。

▼蓮池小学校に避難している人の顔を一人ずつゆっくり映しては頂けませんか。親戚が避難しているところがそちらしいんです。ちょっとでも顔が映ればわかります。電話は通しません。神戸市役所の電話も話し中です。テレビしかわかる方法がないんです。お願ひします。

▼いま映った黒い鉄骨はどこですか？ 長田区の商店街のアーケードが焼けたんじやないですか？ やつぱりそうですか？ みんな焼けてしまつたんですね。何もかもなくなつてしまつたんですねえ。

▼さつき家の倒れたところに木札が立つていて、吉川という字が見えました。あれはどこかわかりませんか。ええ、北淡町はわかつています。身内らしいです。

——取材現場とすぐには連絡がとれず確認は難しいと告げると電話の向こうから「ひいっ」という泣き声が聞こえた。

一方、情報の提供もある。

▼私の親戚が西宮駅北口の高木東町にあります。先ほど電話がかかつて来ました。街は壊滅状態で、親戚の隣の家でも亡くなられた

方があるそうです。この町の人たちは高木小学校に避難して、千人位の人が救援を待っています。道路はなかなか通れず、先ほどやつと自衛隊が来たそうです。そろそろ取材のカメラも入れると思いますよ。

▼垂水区の母に連絡がとれました。三日目に入つても、水も食べ物も貰えないでいるそうです。広報車が一度も来ないので、どこへ行けばよいやらわからないそうです。助けてやつて下さい。

――取材記者への非難、放送内容への抗議も多い。

▼何様のつもりなんだ。カッコいい背広にオシャレなネクタイ、暖かそうなふかふかのコート。あんな恰好のリポーターに被災者が何か喋つてくれるのかね。いざとなつたら泥だらけになつて人命救助をする覚悟で行く記者はないのか。

▼近代都市での大地震ではガス管が壊れてガスがあちこちに洩れていると考へるのが取材記者の常識でしょう。タバコの火は危ないんです。被災地でタバコを吸おうとした映像を見ました。不謹慎ですね。ドキッとしますよ。

▼危険な場所にいるのですから、ヘルメットをかぶりなさい。シャンパーに、足もとは上から重い物が落ちて来ても足がつぶれないようなしつかりした靴をはきなさい。

▼学者が地震の解説したり、評論家が政府の対応の遅れを非難したり、そないなことは後でゆっくりやつたらええんとちやいますか。

どこで何が足らんとか、病院はどうないなつとるとか、どの道通つたら大阪へ行けるとか、テレビが今せなあかんことはもつとあるんとちやいますか。

してやれるることははあるでしょう。しかし、行政は行政でなくてはできないことを精いっぱいやつてるじゃないですか。行政の悪口を言つて足を引つ張るのでなく、励ますよつな建設的な番組を作つて下さい。

▼親をなくして施設に引き取られた子どものことをテレビで見ました。私は七十四歳の年金生活者ですが、私が生きている限り、あのお子さんに月々二万円ずつ匿名で送り続けたいと思います。方法を教えて下さい。

▼神戸市にボランティアの登録を申込んだら「間に合つてます」と断られました。他の民間のボランティア団体を教えて下さい。

▼郵便局は救援物資を扱うの扱わないの？ どつちなの？ 衣類は送れないの？

▼ペットを救援する義援金の送り方を教えて頂戴。わたしは人間なんてどうなつたつて知つたこつちやないんだけど、犬ちゃんや猫ちゃんは可哀そでね。

▼テレビを見てたら「メロンとイチゴしか食べない」という被災者がいた。あんなやつのために寄附なんかしたくなかった。一度寄附したけど取りやめたい。領収書があるが返して貰えないか。

▼報道の力は大変なもので、「オモチャがない」と放送されるとぐにオモチャが送られてきて山ができます。「下着」と言えれば下着の山。ありがたいとは思いますが、正直言つてうんざります。放送は後のフォローをしてほしいと思います。放送で行政が批判されるトやはりすぐに苦情・抗議の電話が続々入ります。これも全く、いやになりますよ。

「神戸に対し失礼だ！」

▼「神戸だつたから良かつた。大阪ならもつと大変だつた」とか「朝だつたから良かつた」とかテレビで何度も言えば気がすむんだ。神戸の人間は死んでも良かつたのか。

▼神戸の人間はな難儀してゐるやで。人も死んだ。家も倒れた。それを何や。今後の教訓たら何たら。わしら、てめえらの今後の教訓のために難儀に遭つとるんか。あほんだら。

▼火葬のことを「死体の焼却」と言いました。ゴミ扱いですね。どんな神経なんでしょう。

▼そりや関西には台風も地震も少ないさかい災害の備えは足りんかつたかもしねへん。じやあ聞きますけどな、関東の人間はどないな地震が来てもびくともせえへんの？ うちら何もしてへんかつたよつてん、家が倒れても当たり前やみたいこと言う人の家見せてえな。

――二日目からは義援金 救援物資に関する問い合わせが増え、日がたつにつれ問い合わせ、苦情は多角的になる。

▼会社が無事で仕事を始めたなんてちつとも良いことじやないんだよ。仕事を始めて物を運搬するから車が渋滞するんだよ。日経連か経団連が指導して仕事をやめさせた方がいいよ。そつしなきや渋滞はひどくなる一方だよ。

▼行政は一所懸命やつています。私の夫は広島県庁に勤める公務員ですが、地震以来徹夜続き、休日返上で着替えを取りに帰宅しただけです。民間の「ローソン」や「セブンイレブン」は民間の知恵と

放送は視聴者の代弁者

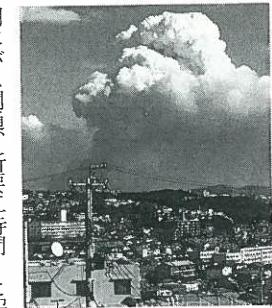
――放送のミスや言い訛に対し好意的な声もある。

▼アナウンサーも人間なんですねえ。声がつまつて次のニュースが読めなくなつて困つてらつしやつたけど、いいじやありませんか。視聴者は待つてくれますよ。あの方もやさしい気持ちを持つたい方なんですね。

▼被災地の人はひどい目に遭つたんだから何にでも当たり散らすのは当然です。「政府が悪い。行政が悪い。テレビが悪い」、そんな悪態にテレビが一々弁解する必要はありません。被災者の中にはいやな人も居ます。私は神戸で、「便所掃除はボランティアがやればいい」と言われました。被災者のありのままを伝えるのもテレビの使命だと思います。

――震災から一ヶ月を経過して震災に関する問い合わせは減り、視聴者応答室は一応の落書きを取り戻したが、かかつて来る電話の総数は震災前の通常の日の数には戻らない。多くの視聴者がこの機会に放送局に電話をかけることを経験し、それぞれに手応えを感じたためだろうか。「政府は何をやつてる」「行政は…」「自衛隊は…」といった電話は本来それぞれの機関にかけられるべきだが、放送は微力な個人に代わつて大きな声で発言してくれる代弁者として期待されている。放送への抗議・苦情もあったが、基本的にはラジオ・テレビは視聴者にとつて最も頼りになる情報源であることを確認した一ヶ月でもあつた。

にもならない。



東の空には黒煙がたちのぼっていた

また、交通情報は不通情報だけではなく、どうすれば神戸から大阪に行けるかを教えてほしいと思った。一月二十五日ころと記憶するが、NHKがニュースで「姫路・新大阪は出発から八時間後、道路混雑のため途中で運転を中止した。バス会社も無責任だが、一方で道路の大渋滞を報道しておきながら一時間で行けると伝えたテレビもあまりに無責任ではないか。

余震情報が恐怖を煽った

「神戸市××区××町××番地のAさんの安否を、東京都××区のBさんが尋ねています。Aさん、Bさんに連絡して下さい」というNHKの安否情報も、地元で見ていた人は少なかつたようだ。水もガスも出ない、給水車も錢湯も数時間並ぶというのに、見る暇などない。出勤したら「名前が呼ばれましたよ」と会社の女の子が教えてくれたが、彼女も台所仕事をしながらまた耳にしただけなのだ。だいたい最初の数日は、電話一本かけるのに何時間もかかった。なにが「連絡してください」かと思つた。もっとほかに報じるべきことがあつたはずだ。たとえば給水車がいつどこに来るかという生活情報。私の住む町内には地震の八日目に初めて民間の小型給水車が来た。それまではもちろん、その後も

水関連情報は皆無だった。あるいは、水やガスが不通というだけでなく、復旧までに一週間かかるか三週間かかるかという生活設計に必要な情報。そうした情報はテレビからは得られなかつた。

余震情報にも脅かされた。「最大M6程度の余震の可能性がある」との報道が震度6の余震が来る」と受け取られ、一部でパニック状態になつたと聞く。それでなくてもこちらは数分ごとに揺れて、数分ごとにピクピクしていた。マスコミの余震情報が、その恐怖を煽つた側面が大きい。むしろ「本震より大きな余震は来ない。どんなに大きくても震度4か5だから、注意して復旧に当たれ」と安心させる報道をしてほしかつた。

最後に、知人の経験を書いておく。神戸市中央区の社宅が全壊したその家族は、子供を美家に預けるため西宮まで五時間歩いた。恐怖のためか、途中で子供の足がまつたく動かなくなつてしまつた。そこへ容赦なくインタビューしてくるマスコミには、怒りを禁じ得なかつたという。震災から一か月。かつて、これほどニュースに頼つたことはなかつたし、これほど裏切られたこともなかつた。やるべきことをやらず、被災者を見せ物にしようとするマスコミなど、もつてのほかである。

(文中写真は筆者撮影)



室内にはガラスの破片が散乱。靴をはくことにした

阪神大震災のコミュニケーションについて、感じたことを書く。

ダンナが大阪勤務なので、東京と芦屋とに別居生活をしているNHKの上田早苗アナが、たまたまダンナの所にいて被災した体験を、

直後の一月十九日、大阪局から「くらしのジャーナル」に出て話していたのが、具体的で迫力があつた。被災者たちにとつてまず最初のコミュニケーションは、くちコミであつたらしい。同じマンションの人たちと「大丈夫ですか」と声を掛け合う。ガスのにおいがあるので、「火は使わないようにしましょう」と言いながら、外に出る。水はどこでももらえるが、電話は公衆電話だけが生きている。店はどこが開いているなどの情報が、道で連れ違つた見知らぬ人から教えられる。公衆電話は長蛇の列。「カードも百円玉も使えない。十円玉をたくさん用意しておいた方がいい」という情報が、前から後ろへと伝えられていく。

被災地の人たちにとつて、全く役に立たない

JOURNALISM

(この話は『STERE』一月十日号に再録さ

いのがテレビだつた。停電だし、持ち出すこともできない。ただ、被災地以外の人びとに、被災地のもよつきを伝えるのには効果があつた。パソコンネットも同様である。救援物資を送ろう、ボランティアに行こうなどと思わせたのは、テレビやパソコンの力が大きい。

しかしテレビは、最初の段階からこれだけやがて区役所からの炊き出しや避難所などについてのお知らせ(つまり生活情報)や「家は無事。どこそこに避難」という紙が、瓦礫の棒杭に貼り出される。くちコミの次はビラである。最も原始的なコミュニケーションが、実は被災直後最も有効な手段なのであつた。停電だから、ラジオが次に有効である。被害の規模、生活情報の伝達に便利だ。FMラジオはコミュニケーション・メディアとして、もつときめの細かい生活情報の伝達に効果を發揮したのではないか。

(新井直之)

電波よつばり、くらしの「」

ジャーナリズム